

二〇一六年二月五日

野に立てば早春の風頬を撫づ
野線となる畝筋の雪間かな
順調な術後と笑みて春を待つ
庭芝のつんつんつんと青みけり

三 刀

よう子

満 天

菜 々

二〇一六年二月四日

庭簾たてしほとりに年の豆
伐られたる台場くぬぎに新芽ふく
雪落つるたび武者震ひする柳

とろうち

よう子

智恵子

二〇一六年二月三日

山伏の法螺に始まる節分会
アドバルン直立したる四温晴れ
姦しき鳥声宮の春近し

うつぎ

満 天

とろうち

二〇一六年二月二日

春泥の轍ぐちゃぐちゃ炭焼場
放つ矢に群鳩の翔つ節分会

よう子

なつき

二〇一六年二月一日

結ばれし枝の神籤に春日燦
風化して読めぬ一句碑凍てにけり

とろうち

豆 狸

さざなみのごとく水尾引く鴨の陣

さつき

陳列の和菓子の色も春隣

満 天

朝窓を繰れば一面雪景色

あさこ

二〇一六年一月三十一日

菜を洗ふ手に水温むさふ思ふ
パンジーの風に笑みをる日和かな
玉の日に透きて蠟梅よく匂ふ

よし女

明日香

ひかり

二〇一六年一月三〇日

薄氷に透けて魚影の動きけり
鉄塔の影が貫く雪野原

宏 虎

とろうち

毎日句会みのる選・二〇一六年二月七日